

平成二十九年 入学試験問題

国

語

文・教・経・医―医 二月二十六日(日) 一四・一〇―一五・五五
理(□のみ) 一四・一〇―一四・五五

注意事項

- 1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
- 2、問題冊子のページ数は十二ページである。
- 3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部、教育学部、経済学部と医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
- 4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつたら、ただちに申し出よ。
- 5、理学部志望者は、□のみを解答せよ。
- 6、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所受験番号を記入せよ。
- 7、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
- 8、問題冊子の余白は草稿用に使用してもよい。
- 9、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
- 10、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

さまざまな分野で「量的拡大から質的向上へ」といわれるようになって久しい。住宅や公共施設をどんどん増やそうという時代から、その質を高めようという時代が変わったのである。あるいは、教育施設を増やすのではなく、教育の質を高めようというのである。福祉施設を^a闇雲に増やすのではなく、その質を高めることが重要である。農作物の生産もまた、大量につくるのではなく質の高いものをつくらうという人が増えている。

こうした変化の大きな要因になっているのが、国内における人口の減少である。長い間、人口は増え続けるものだと考えられてきた。一九七〇年代には、人口増加が問題視され、「子どもは二人まで」^bをスィショウする人口抑制策まで打ち出された。

こうした努力によって一九九〇年代には人口増加率がかなり鈍化し、二〇〇〇年代からは念願だったはずの人口減少に転じた。冒頭の「量的拡大から質的向上へ」というスローガンが叫ばれるようになったのは、ちょうどこの頃である。

そう考えると時代は^①とても良い方向に進んでいるといえよう。増えすぎた人口を減らすことができるチャンスである。「安かろう悪かろう」と^c揶揄された製品やサービスが増え続ける時代から、より質の高いものを生み出す時代へと変化するチャンスでもある。総人口を適正な人口規模に戻すことができ、質の高い生活が実現できる契機なのだ。

この国の国土に降った雨の量だけで日本人が暮らしていくには、人口四〇〇〇万人くらいが適正だという説がある。海外から農作物や肉を輸入せず、化学肥料を使わず、土壌の回復力だけで食料を自給した場合もまた四〇〇〇万人が適正な人口だといわれている。一説には、太陽光や風力や地熱やバイオマスなどの自然エネルギーだけで暮らしていこうと思えば、同じく四〇〇〇万人が限界なのだから。そう考えると、どうやらこの国の適正人口は四〇〇〇万人なのではないかと思えてしまう。この人口は、江戸時代から明治時代へと移行する頃の規模である。このままだく人口が減り続ければ、この国は二二〇〇年頃に理想の人口規模へと到達する予定だ。

ところが、現在の政府は人口減少を喜ばない。経済界もまた人口減少を喜ぶどころか憂えている。なぜだろうか。人口が減

ると成立しなくなる仕組みが多いからだろう。税財源の問題や雇用の問題、国の活力の問題など、さまざまな問題点が指摘される。人口が減ったら今の仕事が成り立たなくなると心配する人もいるだろう。しかし、それは現状の構造を変えないまま人口が減った場合に生まれる問題である。社会構造や産業構造を変えたくないから人口減少が問題視され、人口を増加させなければ大変なことになると警鐘を鳴らす。総人口が一億人を下回るようなことがあれば危機的な状態になると煽る。そんな考え方は、人口四〇〇〇万人が理想であるなどといってもほとんど聞き入れてもらえない。

しかし想像してみてほしい。もし日本の人口が三億人まで増加していたとして、それが二億人まで減少するといわれれば、きつと政府や経済界は「A」といったはずだ。実際には、二億人という「少ない」人口でやっていく術はいくらでもあるというのに。同様に、日本の総人口が一億人を下回ったとしても、やり方はいくらでもあるはずなのだ。イギリスの人口が約六四〇〇万人、フランスが約六六〇〇万人、イタリアは約六〇〇〇万人。いずれも危機的な状態になっているわけではない。要するに「減らし方」の問題なのである。うまく減らし方を発明することができれば、我々の生活を量的拡大から質的向上へと転換させることができるはずだ。「縮減」でも「拡充」でもない。規模を縮小させつつ充実した生活を実現させる、「縮充」の政策が求められるのである。

② 縮充時代の課題は多岐にわたるが、そのひとつは行政依存型住民の意識だといえよう。「まちのことは行政にお任せ」が成り立ったのは、人口増加時代に税収が増えて行政職員も増えた時代のことである。これからは「まちのことは自分たちで何とかする」を意識の基本にスえなければならぬ。住民からの要望やチンジョウにすべて対応するだけの税財源がなくなるからだ。それは、同じく人口が一億人以下だった戦前や明治期や江戸期の地域社会のあり方に近づいていく意識だといえよう。

江戸期の地域社会では、自分たちで地域社会を運営するという意識が定着していた。地域における活動はそれぞれに名称がつけられていて、「結」「講」「連」「座」などと呼ばれていた。「結」は地域の人々が総出で行う協働作業のことであり、みんなで協力して道をつくる道普請などもそのひとつだった。そのほか、田植えや稲刈り、茅葺屋根の葺き替えなども結によって人々が協力した。「講」は講義のようなものであり、自分たちの生活やまちにとって必要なことをみんなで学んでいた。そのうち学ぶ

人たちが相互に助け合う組織となり、いざという時のお金を集めておく場へと展開した。金銭的に困った人が現れたら、講に貯めたお金を使ってその人を助けたという。「連」はサロンやサークルのような集まりであり、「座」は同業者組合のような職業人たちの集まりだった。

こうした仕組みは多くの地域で戦前まで残っており、隣組や町内会などの単位で結や講や連や座の活動が展開されていた。冠婚葬祭はもちろん地域の人たちが協力して実施していたし、福祉や教育もそれぞれの地域で行っていた。防犯や防災も地域で担い、同業者組合が地域で新しい仕事を生み出したりもした。

③ 状況が大きく変わったのは戦後である。終戦直後に占領軍が日本に入ると、なぜ日本は戦争への道を突き進んだのかを調査した。その結果、結や講や連や座によって強い結束でつながった地域社会が行政や政府や軍部と結びついたことによって、国家総動員の戦争へと向かうことになってしまったのではないかと分析したのである。確かに日本では、一九四〇年頃から町内会が正式に大政翼賛会の下部組織となり、強い結束を利用した相互監視機能によって戦争へと突き進んだ面もあった。そこでGHQは一九四七年に町内会を解体するよう命じた。同時に、GHQの指導によって社会福祉協議会が立ち上がった。PTAが組織されたりした。このことは、地域社会が担っていた福祉や教育の役割を別の組織が専任することへとつながり、町内会の役割が小さくなることを意味した。

一九五二年には町内会解体令が廃止され、町内会や自治会は正式にその活動が認められることになったが、これまでのように法律で位置づけられた身分ではなく、任意団体として活動することになった。その後、高度経済成長期には、冠婚葬祭や屋根の葺き替えなども企業が担うようになり、「結」の機能が次々と産業化されていった。「講」もそれぞれが貯金することやいざという時に備えることになり、教育は学校やPTAだけでなく塾などが有料で担うようになり、防犯も民間の警備会社に任せられるようになった。道普請は当然のように行政に頼むようになり、防災もまた行政の責任において実現してもらうべき項目になった。こうして地域住民は協力して自らの地域で活動する機会をどんどん失っていった。

その結果、地域社会における人と人とのつながりは薄まり、孤立死が発生したり、災害時の助け合いがうまく機能しなく

なったりした。人口増加時代は、増えた人たちが働くための仕事が必要だったし、住むための家が必要だった。だから、地域の人たちが協力して進めてきたさまざまな機能を産業化する必要があったし、多くの人が効率よく住むための高層住宅群を整備する必要があった。企業を集積させた業務地域をつくり、郊外の住宅地から通勤させることにもなった。住む場所と働く場所がバラバラになり、座のような同業者組合が地域に存在することは稀hなことになった。こうした課題が人口増加時代に生まれたのだとすると、次の人口減少時代こそは理想的な縮充を達成しなければならない。

そのひとつとしてまちづくりの活動に着目したい。地域の課題は地域に住む人たちが自身で解決すること。企業に頼んだり行政に要望したりするのではなく、自分たちの活動によって解決すること。それは、同じく人口が少なかった江戸期や明治期や戦前期にこの国で行われていたことなのである。

地域のための活動にタズサiわる人口のことを「活動人口」と呼んでみるとする。地域の定住人口が減ったとしても、活動人口が増えるのであれば豊かな地域社会が実現するのではないだろうか。定住人口が減るなら観光客などの交流人口を増やそうという戦略も悪くないが、それで喜ぶ業種は限られている。むしろ、地域の活動人口比率を高めることによって主体的な地域運営を実現させ、それによって地域の人たちのつながりをジヨウセイjするという戦略があってもいいのではないか。

人口一万人の地域が八〇〇〇人へと減るとしても、活動人口が一〇〇〇人から二〇〇〇人に増えるのなら、地域は豊かになったといえないだろうか。少なくとも私は、一万人のうち一〇〇〇人しか活動していない地域よりも、八〇〇〇人のうち二〇〇〇人も活動している地域に住みたい。友達が増えそうな気がするし、楽しいことが多そうな気がするし、老後も助け合って生きていける気がするからだ。

「昔に戻れ」というわけではない。我々はすでにインターネットやスマートフォンを手に行っている。「結」や「連」はSNSで実現させてもいい。「講」はシブヤ大学のようなソーシャル系大学やインターネット上で資金を募るクラウドファンディングで利用できるかもしれない。「座」は異業種が集まる仕事場であるコワーキングスペースや事務所を固定しないノマドワークによって新たな形態を生み出すことだろう。地域社会はエコビレッジやトランジションタウンのように物質や人間活動が有機的につ

ながったものへと向かうかもしれない。いずれにしても、今の社会構造や産業構造のまま人口減少することは避けたほうがいいし、それをもって「人口減少は問題だ」と断定してしまうことはもつと避けたほうがいい。

日本が理想的な人口規模に向かっていると考えるところから、自分たちの生き方を考え始めたい。そういう意識が変われば活動が変わることになるだろうし、活動が変われば生活が変わることになるだろう。人々の生活が変われば、その地域は少しずつ変わることになるはずだ。^④縮充時代に^④応じた地域社会が誕生すれば、そのモデルはインターネットなどを通じて全国に伝わることになる。

日本が「縮充」先進国となり、世界の国々に「その手があったか！」と感ぜてもらえるような事例を示すことによって、各国が安心して人口を減らすことができるようにしたい。「人口が増えなければ国際競争に勝てない」という悪しき B から抜け出す国が増えることを願っている。

（山崎亮「豊かな「縮充」社会へ」による）

【注】

○バイオマス：エネルギー源または工業原料として利用できる生物体構成物質。 ○エコビレッジ：自然と調和した持続可能性を目標としたまちづくりやコミュニティ。 ○トランジションタウン：エネルギーを大量に消費する社会から持続可能な社会への移行を目指す社会運動。

問一 傍線部 a・j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 傍線部①について、「時代はとても良い方向に進んでいる」と筆者が考える理由を、本文に即して七〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問三 空欄 A・B に入れるのに最適なものを、それぞれの選択肢の中から選び、記号で答えよ。

(1) 空欄 A

- ア 二億人でも多すぎるので人口減少を歓迎すべきだ
- イ この国の規模からいえば、適正な総人口は三億人である
- ウ 人口が二億人まで減ったら危機的な状態になる
- エ 人口減少に転ずることは人類にとって危機である
- オ 国を支えるために人口を三億人まで増加させたい

(2) 空欄 B

- カ 道徳
- キ 実情
- ク 条件
- ケ 想像
- コ 神話

問四 傍線部②「縮充時代の課題」とあるが、筆者が考えている解決すべき問題点はどのようなものか。三〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問五 傍線部③について、どのように変わったのか。本文に即してその変化の原因と結果を一〇〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)でまとめよ。

問六 傍線部④について、筆者はどのような社会と考えているか。本文に即して五〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

次の文章は、平安時代後期の楽人で笛の名手、大神基政おわがもとまさが、娘のために音楽についての故事や知識を書き残した『龍鳴抄』の末尾に書かれた一節である。これを読んで後の問に答えよ。

つれづれなるままに、手習ひの時々、させる日記も引かず、そのしるしともなきことを、心にうちおぼゆるままに書き付けたり。おのづから末の世に見む人は、さもありけることかなと思はむ①。また、これはひがごとよといふ人もあらむ②。あはれなることかなと思ふ人もありなむ。にくかりけることかなといふ人もありぬべし。世に隠れたらむ折は、人に見すべからず。もしいとほしみあらむ人は、見む折々、必ず念仏を申すべし。子孫なりとも、好まざらむ人にとらすべからず。さらむ折は、法華經の料紙にやりて加ふべし。もしやりがたくば焼き捨つべし。

古きやんごとなき人の仰せられしは、諸道には地獄あり、そのあたひあるがゆゑに。管絃には地獄なし、料物れうもつなきがゆゑに。

A 嬉しくも罪なきことをしけるかな数ならぬ身はこれぞ悲しき

かやうのことなりとも、人の心にしたがひて、罪あるさまにもしなしつべし。あなかしこ、あなかしこ。そのありさまは、ながく思ひよるべからず。好まむ人には隠すべからず。その器物うつはものかなひたらむ人には惜しむべからず。

月のあかからむ夜、夜もすがら遊びては、腹立たしからむことをも忘れて、極楽浄土の鳥の声も、風の音も、池の波も、鳥のさへづりも、これがやうにこそはめでたからめ、とくとくまゐりてこれをきかばやと思ふべし。かやうならば、功德は得うとも罪にはなるべからず。また、これをあながちに隠して、人には悪わるうせさせて、心のうちにはいひ誇り笑ひて、われひとり人にすぐれむ、さて世にいみじき者にいはれて、これを所得せうとくにせむと思はば、なか罪もなからむ。されば心によるべしとは思ふなり。

管絃に罪なしといふ心は、すいたる者のすべきことなり。すきものは慈悲あり。常にもののあはれなるなり。あけくれ心をすまし、とこしなへに法会誦經ほふ会ずきやうに交じる。仏の三十二相を褒ほめたてまつるに音楽を具し、讚歎歌詠さんたんかやうしたてまつるに五音の調

べを添へたてまつる。花供に奏樂をし、散花に呂律を調ぶ。かやうなれば地獄なしとはいふなり。

この世はいくばくならず、久しからむに八十年。④いかにいはむや、不定のさかひなり。人の物を貪り取りて、後世はながく暗きに入りなむとす。たまたま人界に生まれたりつれども、ほどなく三途の古郷にかへりなむばかりの損やはあるべき。もとの持たる者とても、毎日に百石を食はず。着物多くある人も一度に千疋を着ず。かなはぬ者とても震ひも死なず。持ちたらぬ人も飢うることもなし。千石の大夫といひし者も餓死しにき。これは前世の宿業なり。ただ道心あらむことはかたくとも、罪あるばかりのことはあるまし。

【注】 ○日記…記録類。 ○しるし…証拠。 ○料紙…書写するための用紙。 ○諸道…さまざまな学芸。 ○あたひ…代

価。報酬。 ○料物…費用。 ○器物…器量。才能。 ○所得…自分の利益。 ○三十二相…仏が備えているという三

十二種類の優れた外見の特徴。 ○讚歎歌詠…仏の徳をほめたたえる歌をうたうこと。 ○五音の調べ…音楽。

○花供…仏前に花を供えること。 ○散花…花をまいて仏に供養すること。 ○呂律…旋律。 ○不定…老少不定に

同じ。 ○三途…死者が生前の悪業に応じて苦難を受ける地獄道・餓鬼道・畜生道の三悪道。 ○百石…こは米百

石のこと。一石は十斗、一斗は十升。 ○千疋…疋は布を数える単位で、二反を一疋とする。 ○千石の大夫…高い

俸禄を得る高官。

問一 傍線部①～④について、ことばを補いながら、わかりやすく現代語訳せよ。

問二 Aの和歌について、ことばを補いながら、わかりやすく現代語訳せよ。

問三 波線部はどういうことを主張するためのたとえか。わかりやすく説明せよ。

次の文章は、晋の隱者魯褒が、当時の拜金主義を嘆き、匿名で書いたという「錢神論」の一部である。この文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の關係で送り仮名を省いた部分がある。

錢之為^ル體、有^リ乾坤之象、内^ハ則^ニ其方^ニ、外^ハ則^ニ其円^ニ。其積^ム如山^ノ、其流^ル如^レ川^ノ。動靜有^リ時、行藏有^リ節、市井便易^ニ、不^レ患^ハ耗折^ヲ。難^キ折象^ノ、壽不^レ匱象^ノ。道^ヲ故能長久^{タリ}、為^ル世神宝^ト。親^シムコト^ニ如^レ兄^ノ、字^アさなシテ^フ曰^ハ孔方^ト。失^ハレ之^ヲ則貧弱^{ナリ}、得^レ之^ヲ則富昌^{ナリ}。無^クシテ翼而飛^ビ、無^クシテ足而走^リ。解^キ嚴毅之顔^ヲ、開^ク難^キ発^ハ之^ヲ口^ヲ。錢多者処^リ前^ニ、錢少者居^ル後^ニ。処^ル前者為^リ君長^ト、在^ル後者為^ル臣僕^ト。君長者豐衍^{ほうえん}ニシテ而有^リ余^リ、臣僕者窮竭^{きうけつ}ニシテ而不足^ラ。詩云、哿^よ矣富人、哀^レナリ此^ノ煢^{けい}獨^{どく}。

錢之為^ル言泉也。無^ク遠^キトシテ不^レ往^カ、無^シ幽^{ふか}キトシテ不^レ至^ラ。京邑衣冠、疲^シ勞^{かう}講肄^{かうし}、厭^シ聞^シ清談^ヲ、对^シテ之^ニ睡寐^{びスルモ}、見^レバ我家兄^ガ、莫^シ不^レ驚視^セ。錢之所^タ祐^{クル}、吉^ニ無^ク不^レ利^{ナラ}、何^{ナラ}必^ズ読^ミ書^ヲ、然後富貴^{ナラ}。

凡^b今之人、惟^た錢而已。故^ニ曰^ク軍無^{ケレバ}財、士不^{タラ}來。軍無^{ケレバ}賞、士不^ト往^カ。
 仕^{フルニ}無^{ケレバ}中人、不^カ如^{ルニ}歸^ニ田。雖^レ有^{リト}中人、而無^{ケレバ}家兄、不^{ナラ}異^{クシテ}無^レ翼而欲^シ。
 飛^{バント}、無^{クシテ}足而欲^{スルニ}行^{カント}。

(『晋書』魯褒伝による)

【語注】

- 錢——硬貨。 ○乾坤——天地。古代中国では、天は円形、地は方形と考えられていた。
- 行藏——流通することと貯藏すること。 ○便易——便利で手軽なこと。
- 耗折——摩耗したり折れ曲がったりすること。
- 字——本名とは別につける名。日常生活での呼称として用いられた。
- 嚴毅——いかめしく威嚴があるさま。 ○豊衍——物質的に豊かなこと。 ○窮竭——使い尽くすこと。
- 詩云、芻矣富人、哀此殍独——『詩経』小雅・正月の一節。殍独は身寄りのない人の意。 ○京邑——みやこ。
- 衣冠——貴族。 ○講肄——講義と学習。 ○清談——魏晋時代に貴族の間で流行した哲学的な議論。
- 睡寐——寝る。 ○中人——仲介者。 ○田——田畑。ここでは田畑のある故郷を指す。

問一 波線部 a「能」b「凡」c「雖」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「字曰_レ孔方」について、なぜ錢に「孔方」という字をつけたのか。その理由を簡潔に記せ。

問三 傍線部 2「見_レ我家兄、莫_レ不_レ驚視_レ」を、「家兄」が何を指しているのかを示した上で分かりやすく現代語訳せよ。

問四 傍線部 3「何必読_レ書、然後富貴_レ」を、書き下し文にせよ。

問五 傍線部 4「仕無_レ中人、不_レ如_レ帰_レ田_レ」を、分かりやすく現代語訳せよ。

問六 この文章の内容を、一五〇字以内で要約せよ。

